

Ⅲ 自己点検・評価委員会報告

1998年度に引き続き研究所の自己点検・評価が以下の委員によって実施された。2000年度に自己点検・外部評価を行うことを目標として、1999年度は国立大学の独立行政法人化の内容を検討した。そのために5月26日、国立歴史民俗博物館、篠原 徹教授による「独立行政法人化について」という題の所内談話会を開催し、所員に独立法人化の内容を説明して頂いた。

さらに大学評価機関（仮称）創設準備委員会中間報告と特に研究所にとって重要な分野別教育評価と分野別研究評価の内容、科学技術に関する行政監査で要求されている研究課題の評価内容を検討し、それらについてのまとめを2000年1月の協議委員会で報告した。2000年度には独立法人化を視野にいれた外部評価を実施しその結果をホームページに掲載することを予定している。

また研究所の広報活動の自己点検評価を実施

し、本年度はホームページの充実を図ることとした。ホームページに掲載するものとして、研究所の目的と目標、分野の目的、目標と研究活動やスタッフの情報、霊長類研究所年報、霊長類学系カリキュラム、すでに印刷されている自己点検・評価報告書「サルとヒトの接点を求めて」1996年、「明日の霊長類学の創造に向けて」1997年、「21世紀を目指す霊長研」1998年、また「サル類の飼育管理および使用に関する指針」と「野生霊長類を研究するときおよび野生由来の霊長類を導入して研究するときのガイドライン」等が考えられている。

自己点検・評価委員会：石田茂光・小嶋祥三・櫻井芳雄・茂原信生・中村克樹・竹内克己・林 基治・濱田 穰・平井啓久・松村秀一

（文責：林 基治）

Ⅳ COEとしての活動

1. COE形成基礎研究費

「類人猿の進化と人類の成立」

霊長類研究所および京都大学動物学教室の類人猿研究グループは、表記の課題で平成10年度から文部省科学研究費の交付を受けている。研究目的、申請の経緯等についての概要は昨年度（1999年度）の年報に記した。今年度は研究発足後の2年の経過について昨年度末に開催した研究成果報告会での発表を元にまとめた。

本研究課題は、人類の起源を考察するために、系統発生的に最も近縁の類人猿の進化を学際的に研究することを目的としている。チンパンジーを初めとする類人猿は、進化史上この系統からヒト科を萌出させたという点で、霊長類の中でも特別な地位にある。そこで類人猿研究グループを1)行動、生態、社会、2)形態、古生物学、3)認知、脳科学、4)遺伝学、分子生物学の四班にまとめ、研究計画の初期にはそれぞれの班の研究を深め、後半にはそれらの連携をはかることを考えた。

まず生態班では、アフリカの類人猿について

種内亜種間、種間の生態、社会、行動上の変異を比較するとともに、東アフリカのフィールドに大学院生を長期に派遣し「毛づくろい行動」を社会交渉との関連で解析する事を目的とした。また同行動を三種のアフリカ類人猿で比較する研究会を持った。ギニアのボソウ、タンザニアのマハレではチンパンジー社会の父子判定のための試料、糞、尿、体毛を収集した。新しいフィールドであるウガンダのカリンズでも試料を採集した。ここでは観察の歴史が浅く、詳しい観察は今後であるが、その前に遊動域におけるオス・メスの分布状態を明らかにするため、糞、体毛を用いたDNA分析による性別判別法を確立した。テナガザルの行動と遺伝分析ではヒト及びニホンザルで開発された、マイクロサテライト分析用のプライマーを調べテナガザルで有効なものを選別し、実際の遺伝分析を開始した。

形態班では、身体構成要素が骨格、脂肪、除脂肪軟部組織に大別されることに着目し、MRI等の非侵襲的方法でのそれらの測定を継続した。ヒトはその体脂肪率が非常に高いことで特徴づけら